

能登谷 太郎（のとや・たろう）

1、プロフィール

詩人。小学校教師のかたわら詩作を発表。文学的な稟質に恵まれながら、太平洋戦争時、沖縄において23歳で戦死。死後、ガリ版73ページの『能登谷太郎詩集』が発行された。

<生没>

1922(大正11)年3月15日 ~ 1945(昭和20)年5月3日

<代表作>

詩集『能登谷太郎詩集』

<青森との関わり>

青森市に生まれる。青森師範学校卒業後、上北郡一川目国民学校、東津軽郡浜館国民学校の教師を務める。

2、作家解説

大正11年3月15日、青森市浦町字野脇12番地に生まれる。父阿部捨三、母は戸田トヨ。生後間もなく両親が離婚したので、阿部家から籍を抜き、母方の祖母の手で育てられる。父は阿部幾男のペンネームで淡谷悠蔵らの「黎明」や新聞に短編小説、エッセイ、詩を発表、その反俗的な扮装は県文壇の異色的存在であった。葛西善蔵、石坂洋次郎との間に交遊はあったが15年逝去。母は離婚後上京、長谷川時雨主宰の女流文芸誌「女人芸術」に拠り短編小説を発表した。当時の文壇ゴシップ欄に「女流作家には美人が少ないが、<女人芸術>の矢田津世子と戸田豊子が、美人の双璧だ」とみえており、その後は牧マリの名でルポ・ライターとして「婦人公論」などで活躍したと伝えられる。

両親から文学的な素質を受けた能登谷は「六歳の頃、その老祖母の枕元でルビもついていない新聞を読み聞かせ、解説さえするような驚くべき子」であったという。昭和11年青森師範学校に入学。同期に工藤与志男がいた。16年師範学校

卒業。4月上北郡一川目国民学校に赴任。文学愛好者沼館武志と交遊。17年には工藤与志男が来任、交友関係を深める。小学校高等科同期の吉田嘉志雄編集の同人雑誌「津可留」に工藤とともに参加、第3号に短歌9首、俳句5句を発表する。17年9月東津軽郡浜館国民学校に転任。18年4月、東京府北多摩郡村山東部第78部隊に現役兵として入隊。20年5月3日、沖縄本島内間で戦死。機関砲第103大隊所属。陸軍中尉、享年23歳であった。

天稟の才が開かぬままの詩人の短い人生であった。死後、盟友の工藤与志男編集の『能登谷太郎詩集』(昭和28年)が光鉦会から発行された。詩、小説、書簡で構成された小冊子ではあるが、夭逝した詩人の全貌を知ることができる。

3、資料紹介

○『能登谷太郎詩集』

図書

1953(昭和28)年11月1日

170mm×170mm

詩抄「三等詩集」(9編)、「岸で」(12編)、「わかものの歌」(7編)と小説(未完の小品)と書簡1,2,3で構成される唯一の著作である。同人仲間の工藤与志男の編集で能登谷の死後に刊行された。叔父阿部竜応(合成)の「序」が短い詩人の生きざまを浮き彫りにしている。